論　文

戦時下雑誌『国民文学』の位相
――日本人作家の活動――

渡邊澄子

A Study of War-time Korean Literary Journal Kokumin Bungaku (Part3)
―― Japanese Writer's Role ――

Sumiko Watanabe

『田中英光事典』掲載の「年譜」昭和二十一（一九四六）年に、「戦時下には書けなかった戦争体験や告発的文章を執筆する」とある。戦時下では書けなかった戦争批判や告発が四十六年前後になされているかを検証する前に、既二稿では未見だった全集未収録の『国民文学』と同性格の『緑旗』と『京城日報』掲載文について、簡単に触れておきたい。

『緑旗』との関わり

『緑旗』は京城で一九三六一月緑旗連盟から創刊され、四四年一二月まで刊行された雑誌で、四四年三月から『興亜文化』と改題されている。この雑誌について『傷痕と克服』の著者金允植に「日本国体の精神に則」る民間の日本人主体の団体の「総督府御用団体」で「当時の朝鮮文学界に猛威をふるった」と紹介された団体であり雑誌であるが、「猛威」の権力者が緑旗聯盟主幹でかつ国民総力朝鮮宣伝部長を兼務した津田剛である。津田剛は東京帝大理学部卒の化学者で京城帝大予科教授の津田栄の弟である。津田栄は学生時代から日蓮宗信者で、田中智学が主宰する「国柱会」の活動を朝鮮に根付かせようとした運動が緑旗聯盟設立の原点だった。この雑誌に『日本浪漫派』の保田與重郎や浅野晃らが執筆しているのも頷ける。因みに、宮沢賢治も心酔していた智学は「八紘一宇」を唱えた人である。骨絡みの皇国イデオローグに佐藤清によって教育された『国民文

学』主宰者崔戴瑞が到達した結論は日本精神の象徴と考えた天皇帰一と八紘一宇だった。この一事からも『緑旗』の性格を判断することは可能だろう。

創刊号に掲げられた綱領は、「一、我等ハ社会発展ノ法則ニ従ヒ人類ノ楽土建設ニ寄与セムコトヲ期ス　二、我等ハ日本国体ノ精神ニ則リ建国ノ理想実現ニ貢献セムコトヲ期ス　三、我等ハ人間生活ノ本質ニ基キ各自ノ人格完成ニ努力セムコトヲ期ス」とある。

『全集』未収録の田中英光の『緑旗』掲載文を以下に羅列し、特に問題点の見られるものには要点のコメントを付すことにする。

＊「朝鮮の子供たち」（1941・5）。社の営業で未知の土地に行ったとき、目的地への道がわからず閉口していた時通りかかった水桶を担いだ小童に水を所望すると、「いくらでも、どうぞ」と日本語で優しく言ってくれ、さらに、仔牛を追ってきた小童に駅への道を訊くと、「鮮やかな国語」（国語は日本語）で近道を教えてくれた。その後、汽車で乗り合わせた小学生達が、口を揃えて大きくなったら「志願兵になる」と言ったのに感動し、背後の先生の教育を嬉しく思った。

＊座談会「帰還勇士と文人」（42・1）。出席者・帰還勇士側三人。文人協会側　辛島驍（京城帝大教授朝鮮文人協会幹事）・田中英光・牧洋（朝鮮文人協会常務幹事）・崔貞熙・盧天命。司会者が日米開戦で「御稜威のもと、皇軍将士の決死の奮闘」により「劈頭赫々たる戦果を挙げ」、「聖戦の意義」が広く理解されたと言い、出席者達の発言には「志願兵制度」の浸透を喜び、子が日本のためによろこんで死ぬと言ったことで母を喜ばせたなどと歯の浮くようなエピソードが語られ、田中の、帰還後、電車が南大門を通る時、乗客は朝鮮神宮にきちんと拝礼していて東京より真剣で感動した、インテリは弱いと言われているが、インテリは懐疑心、我、自意識が強いので平生は態度不明確だが、「戦ひといふ我のやり場のない無我の境地」では「西郷南州の所謂『天』なのがわかってくる」ので強い、「戦争と文学」をどう考えるかの質問には、文学者は好奇心が強いから「われ見たり、勝ちたり、書きたりの気持ちが強い」と答えている。

＊詩「ある国民のある日に詠へる」（42・3）。四連から成る一二九行の長詩。そのほんの一部を引用する。「その朝、聞いたラジオニユウス／西太平洋決戦の電波が／その空を霹靂（はたた）きなつたその後で／午前十一時四十分／畏くも下し給はつた　大詔の／朗々とした金色の大御言（おおみこと）が／いまなほその大空に溢れ輝いて／ゐますが如く思はれたから」（一連の一部）、「さて新しき世紀のため／日本人の世紀のため／大和民族の血潮をかけた／真の戦ひは始まれりと呟き呟き」（三連の一部）などとあって太平洋戦争勃発に昂奮しているが詩として優れているだろうか。

＊座談会「近藤春雄・湯浅克衛両氏をかこんで　半島文化の躍進をかたる」（42・8）。出席者　近藤春雄（ナチス文化研究家）・湯浅克衛・田中英光・金村龍済・牧　洋・森田芳夫（司会・『緑旗』編集部長）。在日のプロレタリア詩人だったが転向した金村龍済の発言量は多い。徴兵制には文化人もみんな喜んでいると「徴兵制」を評価し、皇民化推進には「軍隊的な教育」が必要と言い、日本を朝鮮の真の祖国として、その信念の下に自己錬成に力を注いでいるが内地人文士の認識不足が残念との発言に、湯浅が中央の文化人の朝鮮理解の不足を肯定し、田中が、「併合の御詔書」にある「民

衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チ」の「お言葉」を服膺すれば問題は氷解する、「内鮮一体も韓国併合の時の御詔書に解決の途は全部示されている」と言い、「国語常用の問題」でも国語のマスター運動を主体的になすべきと発言している。「国語」とは自国語の朝鮮語ではなくて日本語のことである。さらに、日本文学の伝統でもある「草莽の志」を半島に灯すことが必要などともある。

＊「平田篤胤」（42・11）。篤胤について詳細に紹介した上で、「（一）単純明快であつて曖昧さのない論　（二）敵を打つには先づ敵を知れと云つて外国思想をも包含する雄渾な気宇　（三）宣長の善悪二元論を排して善一元論の神道を樹立した事　（四）明るい日本独特の幽明観を樹立した事」の四点について長々と感動した田中の理解を述べ、すなわち、「これまで云はれる、日本的性格とは兎もすれば、心境的な、もの、哀れ的な、主情的な、消極的一面でばかりありすぎた。篤胤の如き、意欲的積極的人生肯定的楽観的な思想に、ぼくたちが日本的性格を感じるのは、甚だ嬉しいことである」を結語にしている。

＊「碧空見えぬ」（43・1）。田中自ら命名しているように「楽屋小説」である。友人から京城日報の学芸部長を紹介された三日後、東京の作家が来て半島の文人二、三人と会うことになっているが来ないかと誘いを受け、半島文人には一人の知己も無かったので好機と出かけた。座中のなかで親近感を抱いたのは、創氏名森徹と紹介された朝鮮の中堅作家李星薫だった。英光は折よく京城日報に「生涯の道の草」を書いたので名前を知られていて嬉しく思う。その頃の森は諺文で書くべきか、国語で書くべきか悩んでいた。その日の座談会（「半島文化の進路をかたる」であろう）の出席者のなかで田中の興味を強くひいたのが森だった。森が伊勢の皇大神宮と出雲大社に参詣した時の感動を「なにごとの在しますかは知らねども、かたじけなさに涙ながるる」を引用しての感慨披瀝に田中は感動する。「帰還勇士と文人」座談会でも一緒になり、この頃から急速に森と親しくなっていった過程が中心に書かれた当時の田中の動静がわかる作品である。

時局便乗主義者とか御用作家とか言われると悩む森に「ぼく」は「憤然として」「御用作家で好いぢやありませんか」、「皆、お上の御用に立つ為に作品を書いてゐるんでせう。（略）日本の様に君民一体、官民一体、軍民一体の国では、皆上御一人の御為に働き、作品だつて書くんでせう。（略）天子様の御味方に粉骨砕身」しているのにと彼を元気づける。ある日のこと朝鮮そばに誘われ、そばがあまり好きではない「ぼく」の為にカルビと酒を注文してくれる。彼は酒を飲まない。酔った「ぼく」が怪しげな街に誘うが彼は頑固に同道しようとせず去ったので「ぼく」は一人で行く。半島同胞に徴兵制実施の報が伝わり、「晴天の霹靂であり、曇天に日輪を仰いだ想ひ」から、すぐに『国民文学』主催で軍参謀との座談会が持たれた（42・11『国民文学の一年を語る』）。「その席上で、日本への愛情と徴兵制の喜びを語る森さんは如何にも嬉しそう」で「碧空に太陽を仰ぐ想ひで、母国日本の躍進と共に進んでゆく半島の新しい姿を眺めてゐるやうであつた」とあるが、文脈から田中の森との共鳴意識が透けて見られる。

ついでにこの時期の『緑旗』に登場の、謦咳に接したことは無いが、私が学生時代、以後も偉い学者と思いこんでいた人の発言に触れておきたい。まず、当時は京城帝大教授、四十四年からは東京帝大教授の、日本最初の本格的法哲学者で後に日本学術会議副会長を務めた尾高朝雄の「日

本の理想」(42・2)。ここには、「驚嘆すべき日本の行動力の源泉」は「万邦無比の国体」にある。「日本人の国民的優秀性、忠孝両全の道徳的実践、国土環境の秀美」を「原動力」として「日本の向ふべき方向」に「国民の総力を一点に集中せしめて、偉大なる建設力を発揮」している。「日本の理想の確立」には「肇国の精神に徹すること」でそれは「八紘一宇である」。「いまや、戦局はきはめて有利に進展しつつある。戦争と共に雄大な建設が進められようとしてゐる。この共栄圏の建設、特に早くも皇軍の制圧下に在る南方諸地方の経営は、もとより飽くまでも道義の精神によって指導せらるべきである」云々。

当時、九州帝大教授の国文学者高木市之助の「しこの御楯」(42・3)。『万葉集』巻二十に載る防人の歌「今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯と出立つ吾は」についての丁寧な解説だが、始めに、大東亜が明け初めた「皇紀二千六百二年の劈頭に筆を執つてゐる」ことの「無上の歓喜」を述べ、「しこ(醜)」、「御楯」さらに「み(御)」、「かへりみなくて」の語義を詳しく説明し、父・母・妻など愛する者への執着を断ち切って、大君への絶対の帰依心から御楯となって出立つ心を披瀝した歌とある。高木の代表著のひとつ『吉野の鮎』(41・9)について『日本近代文学大事典』には「歌謡の文学性の良心的な追及は、時局の圧力を凌いで推進されたものであろう」とあるが、同時期のこの文章は圧力を凌いでいるだろうか。

評論家古谷綱武は「緑旗の仕事について」(43・9)で、「緑旗の文化運動に、非常に関心をもちましたのはかういふ生活運動が下からもりあがつてくることが、実はもつとも大切なことだと思つたから」とあって、緑旗聯盟の出版物として「戦ふ日本の家庭」「家庭食事読本」「子供の食事研究栞」「離乳期の食餌の作り方」を挙げて詳細に紹介し、「内地の女子青年の錬成会で、これから山中湖畔へいつて参ります」で結んでいる。女子錬成会などに彼は行っていたのだ。

座談会「働く娘の幸」(44・2)には円地文子が岡田禎子や津田節子(経歴は未確認だが、津田栄の妹で、剛と共に登場回数が多い。その妹の津田美代子も数回の発言があり、発刊初期は津田一族が誌面構成に重要な役割を担っている)とともに出席しているが、飛行機工場で働く女性達のたくましさに感動したと言い、「アツツ島の玉砕を聞いた時、瞬間第一にぐつと胸に来たのは、ああこれからは女の人はどんどん子供を産まなければいけないと思ひました。(略)あの古典の精神ね。一日に千人くびりころさんと、伊邪那美命がおつしやると伊邪那岐命がそんなら一日に千五百産屋を立てんとおつしやつたあの精神が、今この戦争の最中に輝かなくてはいけないと思」うと発言している。戦死者激増に女は子産み機機能を発揮せよと、本気で言ったのだろうか。端倪すべからざる古典知識をもつお嬢様育ちが言わせてしまったのだろうか。改題された『興亜文化』(44・3)に小説「母の火」を乗せている。作家仲間が軍医として死を覚悟の出征する話であるが、そのなかに、「大東亜戦争の開始が私どもの中に、ほんとうの日本人の感情を掘り当てさせてくれたありがたさを私は日々新たにしてゐるけれど、五六年前の私たちの生活をかへりみると、一体、どんな眼で何を見、何を感じて来たのやら、恥ずかしいことだらけである」とある。特集「徴兵制実施一周年記念」号(『興亜文化』44・8)では朝

鮮の志願兵が日本で受けている訓練を見学しての感想だが、内地兵と朝鮮兵が差別なく対等に、厳しい規律のもとで教育されていた、「これでこそ、一人一人の青年が、大君の赤子として明く清き心に生きぬき、君の為、国の為に笑つて死に得る性格がつくられるのである。私は今この観察に於いて得た、深い信頼感をそのまま、朝鮮のお母さん達へお送りしたい気持で一ぱいである」と結んでいるが、韓国（朝鮮）人が日本軍兵士として戦場に赴く厳しい現実の表層しか見ていない。このほかに「古典物語り・萩と月―奥の細道抄」を載せている。「闌位」の作家と位置づけられる優れた作家だけにこのような発言のあったことが惜けない。

『京城日報』との関わり

英光は、一九四〇年一月、再度の召集で激戦をよく凌いで復員し、職場に復帰した。軍需産業でもあった社は、慰労から東京支社に臨時転勤させてくれた。「杏の実」を持ってこの時初めて太宰を訪ねている。太宰に添削指導を受けたこの作品は太宰によって『オリンポスの果実』と改題されて『文学界』に持ち込まれ、これが池谷賞を得て作家登録され、田中の名誉欲は充たされ、さらに噴き上がった。四十一年二月、京城出張所勤務を命じられ京城に戻るが文学活動に心が傾き、朝鮮文人協会の常任幹事となる。前掲「碧空見えぬ」に「勤め先のある友人に、京城日報の学芸部長を紹介され」たとある。名誉欲は文学関連著名人との人脈作りに連動する。学芸部長に紹介されたことで『京城日報』文化欄に「生涯の道の草」の三回連載（41・9・2～4）を始めここへの発表の機会を得る。「生涯の道の草」（全集未収録）について「早稲田の露文にゐた貧乏な文学友達の随筆」と「碧空みえぬ」に書いている。その友人は露文科の学生時代、同人文学雑誌『非望』の仲間だった。「ぼく」はその頃流行のイズムに溺れていて（敬愛する兄の影響から共産党のシンパになったこと）何人も仲間に引き入れたが彼はイズムには背を向けてロシア文学に熱中していた。両親を早く亡くし兄弟もなく、叔父に学資を出して貰っていたが学院の法科から露文に転じたため学資を絶たれ貧のどん底生活に追い込まれた。休刊していた『非望』が再刊され送られてきたそこに彼の「この一筋に」が載っていた。「ぼく」が初めての本の出版社に行っていたそこに「ぼく」の本を買いたいという電話があり、丁度著者がここに来ていると言うと電話は切られたという。電話の主は、「生涯の道の草」をただ「一筋」として一生をかけた芭蕉のように、「この一筋」を生きているらしいあの友人だった。これは好い文章だ。彼が電話を切った真意を知りたい。

検証しきれていないが、管見では『京城日報』での発言はなお、「パセパンシャンの茶毘の煙」（42・1・27～29）、「〝葉隠〟について」（42・3・1～4・2、全集第二巻収載）、「半島文壇の新発足について」（42・9・1～4、全集第二巻収載）、「歌舞伎に就て」（42・10・7～11）、「離鮮の言葉」（42・12・2～4）がある。「パセパンシャン」とはシンガポール郊外の丘陵の知名で、ベンガル湾航行途上で不帰の人となった二葉亭四迷の亡骸を荼毘に附した丘であるという。二葉亭は「文学は男子一生の事業とするに足らず」と言いながら文学上に不朽の名を残した「外は、何

一つみるべき事業を残さずに死んだひとでもあつた」、子規・漱石・鷗外など日本近代文学の礎石を築いた人たちは揃って「熱烈な愛国者」（そうだろうか。漱石は違う）だったが二葉亭は少し違い、「東亜における北方の守りの重要さを説い」て、少年時代は軍人を志し、後には外交官を目指した人だった。日本軍がシンガポール入城の日に誰か、「この丘に一束の花を捧げて」ほしいとある。連載二回目の文章に隣接して、「国語を大東亜の共通語に　半島での普及は一大急務」の活字が踊っていて、感を殺ぐ。「〝葉隠〟について」で、この言葉を知ったのは満州事変での爆弾三勇士の名と共にだったという。爆弾三勇士は戦争への国民精神作興のための作り話なのだが、與謝野鉄幹・晶子が真っ先に事実と信じて称賛し、この勇壮さは国民の総てが見習うべきだと高唱して士気高揚に成果を挙げているが国の策謀にまんまと嵌っていたのだ。(注1) ここでは田中の「葉隠」理解を述べた上で、葉隠れ精神こそ「現代において流行すべき立派な性格を備えたもの」でここに「文学的覚悟」を「発見」したとある。

全集収録の「半島文壇の新発足について」に触れておきたい。牧洋・金村龍済と三人が発起人となって文人協会の人たちにも声をかけて朝鮮文人協会を新たに積極的運動主体として組織化することを話し合い、十三項目の文化活動具体案を決定している。「内地の日本文学報国会が大々的な結成をみ、華々しい活動を開始した」ことに「刺激」されてのことである。「今日ほど文学者の仕事が直接、御国の役に立つ時代はないと思う」、「国内における米英敵性文化の撃滅、日本語整備（常用漢字）の問題、大東亜共栄圏内への日本文化の普及等々」に対して、朝鮮ではさらに「国語常用の問題、日本精神文化普及徹底の問題、家庭文化の問題と、徴兵制に絡んで直接具体的に御国の役に立つ仕事」など問題は山積しているとある。「日韓合併直後から朝鮮は立派な大日本帝国の一地方」なのだの認識から、「どうか、半島の青年作家も、中堅作家も老大家も、奮って、朝鮮文人協会の文化活動を内地の文報に負けないように努力して頂きたい。内地では、いうまでもなく、島崎藤村氏も武者小路実篤氏も横光利一氏も小林秀雄氏も挙って文報に参加し、文化活動をしておられる。今では朝鮮の特殊性が日本全体になにものかをプラスする存在になっている。」とあり、「あなた方の積極的な起ち上がりを、ぼくたちは切望する」を結語とした戦争使嗾である。

戦後の田中英光

『酔いどれ船』に虚構化されて描かれた、東京で開催された大東亜文学者大会の参加者の帰途、朝鮮を経て帰る一行を歓迎するために釜山まで迎えに行き、京城で歓迎会を開いたのは一九四二年十一月のことである。英光は一行を見送って間もない十二月に東京転勤を命じられて帰国している。職場は横浜市鶴見区で『田中英光事典』の巻末年譜によると最新式本社工場庶務部文書課報道係主任という地位だが、この地位は暇で、事務所で小説を書いていたと言うから、それで給料を貰える有り難い職場だったことになる。『我が西遊記』上下を四四年に出版している。戦局の悪化に伴って、家族を四四年九月に静岡県三津浜の旅館富士屋の一室を借りて疎開させ、四五年三月からは同地の、『我が西遊記』の版元桜井書店主桜

井均の別荘に移り、戦後、東京に戻るまで無料で貸して貰っている。英光は家族と別居して世田谷の社宅に住む。英光の勤務会社は軍需工場である。四四年十二月に『新潮』に発表の「昔の家」に描かれている、青年工員たちと血書嘆願を持って社長宅に行き、勤労報告隊として現場で働いたのは事実で、この主唱者、嘆願書執筆は英光であった。戦争協力のど真ん中に意志的に入っている。この工場は四五年四月の空襲で焼失し、本社は臨時に東京事務所に移転した頃、金木町の生家に疎開していた太宰を八月四日に訪ねている。そこに会社から満州への転勤命令が入り、八月十七日赴任の予定が敗戦で中止の幸運に恵まれる。九月に入って工場再建に当たって人員整理の対象とされ、十年間勤めた横浜護謨を六千円貰って退職となり、一旦家族のいる三津浜に行き、ここで共産党に入党している。学生時代に心酔していた兄の影響というよりもっと浮薄な当時の潮流への付和雷同的行為だったように思われるが共産党シンパとして活動した時があったあの時の高揚感が蘇ったのかも知れないが三月に共産党に入党し、ふた月後の五月に沼津地区委員長になっている。入党するに際してどのような思想と覚悟があってのことだったのだろうか。「君あしたに去りぬ」（49・12『群像』）に、「会社を馘になったので、半年ほど妻子の疎開先の田舎におり、貧乏に追いまくられ、文壇に地位を確立しようとあがき、妻と寝る余裕も失っていた。（略）お手軽作家ばかり流行し、自作が売れぬのに公、私憤を感じたし、党威の隆盛から今にも平和革命成功かと錯覚したりした結果（学生時代に少しその非合法運動をした共産党に）入党した」とある。人生行路を決定する重い問題がなんと軽々しく決定されていることか（「地下室から」49・5『季刊芸術』）。敗戦後の混乱期とはいえ、すぐに入党を認め、ふた月後に地区委員長にした共産党も共産党だと思ってしまう。党から支給の給与や原稿料を活動資金として党に投入して家族を貧窮に追い込みながら、ヒロポン等薬物常用者となっている。このような様態が共産党員田中英光の現実だった。

軽挙妄動的入党は離党も軽い。主義は認めるが人間は信じられないと入党から一年での離党である。間もなく出会った山崎敬子に溺れ、薬物・女・酒のために「お手軽」作品量産時代に入る。敗戦後、死までの四年間に『事典』の脱落皆無とは言えない「著作目録」（雑誌・新聞の部）によると、いくつかのハガキ問答・アンケートも入れると百八十五作に及び、既に印刷に回っていたものも含めた死後の発表は再掲をふくめて五十作、単行本はアンソロジー、『選集』（全三巻、50、月曜書房）、『全集』（全十一巻、64～65、芳賀書店）、文庫を交えて（選集・全集は一で数えた）、当然重複するが八十三冊に及ぶ。この量産は金欲しさから書きなぐった駄作の多さをも示している。戦後作品の膨大量の総てを読んだわけではないが、私が興味を持ったのは年代順に挙げれば、「戦場にも鈴が聞こえていた」「酔いどれ船」「地下室から」『愛と青春と生活』「野狐」「奇妙な復讐」「さようなら」である。なかで最も著名であり、代表作とされているのは『酔いどれ船』だろうが、虚実取り混ぜてはいるが、東京で開催された大東文学者会議に出席した満蒙・中国・朝鮮のゲスト文学者一行の帰国に際して立ち寄った朝鮮で釜山まで迎えに行き、京城まで同道して歓迎会を開いた主催者側の文人として勤めた朝鮮文壇の様子の事実は興味を惹くが、名誉欲・女・酒への耽溺描写の薄汚さには辟易させられ、今は採り上げる気になれない。

戦場小説

田中英光は教育召集と実戦召集合わせて約二年間の軍隊生活を体験している。特に後者では激戦の戦場を生きぬいた勇士だった。この戦争体験を描いた作品はまだあるかも知れないが、戦中作に、「なべ鶴」「姑娘の聖歌」「鈴の音」「月は東に」「ある兵隊の手紙」「黒蟻と白雲の思い出」「呉王度」「志願兵の奮戦」「山西省の桜」「少年支那兵」、戦後作に「戦場にも鈴が聞こえていた」「戦場で聖歌を聞いた」「奇妙な復讐」などがある。戦争下の戦争小説は、言論の自由圧殺度がまだ希薄だった戦争も緒の段階だったことを押さえておく必要があるだろう。

「鈴の音」は『われは海の子』(41・5、桜井書店)所収の初出不明作だが、英光の戦場小説には「鈴」が多出する。降り続く雨で下着までびしょ濡れの極寒での強行軍で一歩誤れば三丈もの渓間に顛落の恐怖を抜け出た小部落は前の部隊によって放火されていた。休む間もなく進もうとした時、「明るい鈴の音」が聞こえ、見ると親馬の傍に駆け寄って行く可愛い仔馬の首に下げられた鈴の音だった。「この一瞬の風景がぼくには明るく焼きつけられ」その後の夜行軍ではいつも「ぼくの耳朶」に鈴の音がきこえていたとある。ここには優しい人間性が見られ、戦場体験での印象深い心和めることだったのだろう、この種の場面が題材とされている作品には「姑娘の聖歌」「戦場で聖歌を聞いた」「戦場にも鈴が聞こえていた」などがあり、殺された親馬の乳房に縋る仔馬の鈴の音という哀切な場面をも含めてそれを描く作者の目に優しさがしのばれてほっとさせられるものの、だが一転して戦争実戦者の視線・態度に変わる。「鈴の音」の結末は倒れた馬に頭をのせて老百姓が倒れている傍で、首を振るたびに鈴を鳴らしながら青草を無心に食べている仔馬の痛切な場面である。「鈴の音」より前の作と思われる(『オリンポスの果実　外五篇』所収、40・12、高山書院)所収の「姑娘の聖歌」は、山西省の奥深くに転戦中、辺鄙な部落で二、三日駐留することになって押し入った大きな農家には五十位の農夫と「呆気にとられ」たほど美しい十一、二歳くらいの少女がいた。別嬪、別嬪と騒ぎながら幼なさと美しさから犯そうとするものはなく、農夫が何処からか運んできた綺麗な布団に喜んで寝ようとした時、大男の西洋人が来て、私の家の布団を盗んだ、泥棒は日本兵の名にかかわる、返して欲しいと言う。西洋人は牧師だった。日本兵へのへつらいから農夫が勝手に持ち出したと知った牧師は日本兵に貸すという。少女が飛んできていきなり農夫の横面を殴りつけたのには驚いた。父親の卑屈さへの怒りだったのだろう。牧師が五、六人の少女を呼んできて賛美歌を歌わせてくれた。「ぼく」は「彼の支那民族に対する愛情と、布教への熱意にうたれ」たという作品だが虚実はわからない。

戦後の小説

戦後小説では「戦場で聖歌を聞いた」(46・3・4合併号、『新小説』)、次いで初出不明の「戦場にも鈴が聞こえていた」(47・11、『桑名古庵』

所収、講談社）が早い段階で、戦争小説として書かれている。まず後者を先に。降り続く雨の中を饑餓に喘ぎながらの行軍では民家や中国人を見ると命令も指揮もなく飛びかかり、何一つ残さず徴発と称する略奪をする。悲惨な行軍は誰かが歩きながら眠って前の兵から手を離せばその後に続く数十名は夜の山中で迷子になり、また誰かが足を踏み外せば後続者も谷間に顛落し、誰かが前にのめると百足行列は総崩れになり、谷に落ちたり川に落ちたりすればそのまま戦死にされた。発狂者も出た。ある大学出の補充兵は分隊長にどんなに殴られても、装具を置き忘れ、脚絆、防毒面、雑嚢から銃まで忘れたのか捨てたのか平然と笑っていて、彼は分隊長によって殺された。八路軍を追ってきた五、六戸の小集落では小隊長が真っ先に略奪し、盗るものがなくなると火を放つ。「火の中に繰り広げられた光景は」「地獄よりも陰惨」だが、兵隊たちは焼死体には無頓着で放火の熱で暖をとり服を乾かすのだった。またの日、前方の山道を早足で登っている明らかに良民と思われる男を、二人の兵が五円を賭けて射的屋の人形倒しの興味で殺し、貧しい老百姓から財布をもぎ取り……。この作の最後は彼等が「花火大会」と称する攻撃で良民の血が流されるが、犠牲となった母馬のもはや出ない乳を求めて縋る仔馬の鈴の音は哀し過ぎる。まさに三光作戦である。この二作は英光生前に発表されているが、死後初の発表となった「奇妙な復讐」（49・12『新小説』）と内容が重複するので時系列を無視して採り上げたい。

「奇妙な復讐」

英光の戦場小説に屢々登場するのは気心の合った浅井一等兵である。軍隊という非人間的な組織のなかで信頼できる人間関係はつくり難いのだろう。浅井一等兵を傷つけたのは二度目の召集の時だった。二度目は一度目の「古参兵から怒鳴られ、撲られ」「褌まで洗はされる」「屈辱」は味わわされずに済んだが、実戦は、「聖戦、皇軍、神兵の美辞麗句」で聞かされていたものとは逆で、「大挙して中国に、殺人、傷害、放火、強姦等におしよせにきたのではないかと思はれるほどだつた」。はじめは、敵弾の音を聞いても実感が無く、演習感覚だった。それは兵隊ごっこやチャンバラ遊びをした子供の頃、中学から大学卒業までの必修の軍事教練の延長心理だったことによるが、戦争の恐怖はすぐに思い知らされた。足下に転がっていたまだ十五、六歳の中国兵の屍体、徴発する何一つない、猫の子一匹もいない貧しい家々。分隊が小休止していた時、機関銃手の木村が撃たれて呆気なく死んだ。戦争を実感すると「ヤケクソな気持」が「ぼくたちを無道徳にし、刹那の享楽に溺れさせ、女子供を哀れむより憎ませ、凡ゆる残虐行為をほしいまゝにさせ」ていった。とはいえ、初めは「老幼婦女の暴行される」のや、「少女が荒くれた戦友たちに輪姦される」のを「傍観できるほど、心がすさんで」はいなかった。恐いのは饑餓と喉の渇きを抱えての際限の無い行軍だった。ようやく露営となる。古兵が徴発に出かけ、先頭部隊に荒らされて「姑娘どころか鶏一羽いない」とぼやきながら戻ってきて行軍開始。道は断崖絶壁だ。だが見上げ見回す自然の風景は美しい。英光作品で自然への感動を描いた花鳥風月の描写はいい。一軒の土造りの家が見つかる。女達の烈しい泣き声。行ってみると

兵隊達の前に五十位と七十位の二人の女の間に「度肝をぬかれた」ほど美しい娘がいて恐怖に戦いていた。二人の女は娘の母と祖母だろう。兵隊は浅井と日置だった。入ってきたのが坂本（ぼく）と知ると、「坂本はん。あんたも後で乗らんかい。こんな別嬪は少ないでや。これからカンカンしてこます」と言い、「早くカンカンさせんかい」と急がされた日置が「よッしやあ」とゴボウ剣を娘の胸元に突き付けながら早く裸になれと怒鳴ると、娘は泣き叫び胸をかきむしって倒れながら拝み、母親らしいのが嗚咽しながら土間に倒れ激しく身体を震わせている。すると祖母らしいのが諦めきった表情で歯をカタカタ震わせている娘に何かを長々と話し上衣を脱がせた。一糸纏わぬ雪のような素裸の娘の睫毛から溢れる涙。日置がその上にのしかかるのをみて、「激しい情欲と憐憫に身体をひき裂かれ」ながら、見張りと言って表に出たぼくが慌てたように駆け込んで、「中隊長が下から登ってきた」、「早く逃げないと」と叫ぶと、浅井たちは慌てて逃げた。浅井たちを騙し、少女たちを助けることに成功したが、これは事実かフィクションか。その後日置は呉王渡攻撃戦で死んだ。浅井には嘘がバレたらしい。呉王渡占領直後の「集団輪姦の凄まじい、或いは厭らしい怪奇的な風景」はひどいものだった。外から見えぬ地に入り口の小さな穴が十幾つかあった。ぼくが歩哨の任務を済ませて用便のため降りると「キヤアキヤア泣き喚く、女子供の声」。覗くとそこには「詳説を憚る光景」が展開されていた。老幼婦女子、十二、三歳の少女、赤子を負ぶった女、盲目の老爺の手を引いた女、「女でさえあれば」「日本兵の情欲の対象になるのだった」。「時田軍曹が泣き喚く赤ん坊を、女の腕からもぎとり、大地に叩きつけると、女に足ばらいをかけて」倒して「野獣のように跳りかゝってゆく」。また、「ひとりの美しい娘を四、五人の兵隊が代わり番こに犯している」。分隊の横田は村に入ると「姑娘探しにウノ眼タカノ眼にな」り、「既に他の兵隊に試食済みの胥肉も、六十の古肉も見境なく、片ッ端から上に乗つている。ぼくはそれらの光景を長く見ていられなかった。胸が鳴り嘔気さえする。自分の情欲も哀しい」とあるが、『愛と青春と生活』に描かれるような情欲の激しい彼が嘔気を抑えて見ていただけの〈いい人〉でいられただろうか。

それからの半年間は慰問袋も来ず、慰安婦に接する機会もなく、荒涼たる毎日だった、というが戦場にあって慰安婦は必需なのだろうか。理性や知性は働かないのだろうか。ある地で夜明けを迎え、霧雨のため午後まで出発延期となる。徴発に出かけた兵隊たちが手ぶらで帰ったなかで浅井一等兵のみが隠れていた姉妹を得たと語る。出発。山の中の小部落では片端から民家に火をつけて焼く。次の駐屯地にも慰安所がない。酒保や慰安所があるのが当然の書き方だ。古兵たちは便衣斥候を志願して「美婦」漁りに行く。「多くの兵隊たちの性雄武勇伝」を聞く。横田一等兵の体験話は忘れ難い。「亭主の目前で、その妻を犯すのはなにより胡椒のきいた愉しさ」という。妻を庇う青年の前で美しい若妻を襲ったとき「法境悦の直前」に撃たれた例のあったことを思い出し、女を犯す前に夫に鉄砲を一発撃った。「もう一遍、愉しみたくな」って引き返すと二人とも死んでいた。撃たれて傷ついた夫との「合意の心中」だったらしい。命を奪ってまでの残虐さで中国女性の人間としての尊厳を奪いながら手柄話、笑い話にする兵隊の人間性皆無の卑劣さへの怒りは作品から読み取れない。

駐留後、三ヵ月ほどしてやっと二人の春婦が来た。慰安所はなかったが大年増の二人は引っ張り凧だった。一月ほど経て「正式の慰安所」がで

き、若く、化粧もうまく、病気の危険も少ないというので千客万来の盛況ぶりを呈した。「禁慾半カ年」のぼくも嬉しくて浅井と慰安所に行った。二十人ほどが並んでいて、あと五、六人で自分の番になるというとき後ろを見るとまだ十五、六人が並んでいた。自分の前の二十人のその前に何人がいたのだろうか。慰安婦とされた女性は毎日何十人もに凌辱されることになる。禽獣的情欲は男の根本問題（坪内逍遙『当世書生気質』）なのだろうか。戦争は人間を鬼にも悪魔にもする。田村泰次郎の戦争小説はそのことを明かしているがわけても「蝗」（64・9、『文芸』）は慰安婦を描いて戦慄的である。(注2)

もうすぐ自分の番が来るというとき見世物になりながら桑木が歓喜の声を挙げている姿に「人間の情欲の哀しさ」を見、そっと宿舎に帰ったのを浅井に何故かと問われ、「本当は女が好き」なんだが「あんな多勢と一緒に女買いするのは恥ずかしい」と打ち明けると、二、三日して浅井が一人の女を連れて来て、ぼくに渡してニヤニヤしながら姿を消した。女は浅井から金を貰っているからとビジネスを求められ、結局、快感と不快感で本能を充たした。二、三日後、異常な痛みに蒼くなった。浅井に話すと「淋病」だと言い、民間療法を教えられたが悪化は急速だった。軍医に診せれば営倉か陸軍刑務所か、軍人手帳に赤字で記入されて「一生の傷」になる。自殺を考えた。その時、瞼に大きなカツレツが浮かんだのだ。中学時代に父を失い、めったに御馳走を食べられず、一年に一度、クリスマスの前夜だけ兄が特別カツを食べさせてくれたあの味が脳裡にひらめき、「あのカツを食う迄はどんな恥を忍んでも生きていようと思い返し」、食欲が勝って死なずにすんだ。覚悟して分隊長代理に白状すると、彼は、「なんだ、知らなかったのか。あの女は分隊の兵隊たちが交代で廻してから浅井が使ったが、それから又、お前に廻したのか」、横田は梅毒だし浅井は淋病なのを知らずに「抜き身」だったら堪ったもんじゃない、すぐに「後退入院」せよと親切に言われ、浅井と日置に犯されようとした一人の美少女を助けたことに対する浅井の復讐ではあるまいかと、疑いが浮かんだのだったが、自分が無知な為、「無意識に奇妙な復讐を受けたと解する」ことにした、というお話。つまりは女性凌辱の性欲小説だ。

『愛と青春と生活』（47・3、富国出版社）

書き下ろしである。戦争下、わけても太平洋戦争勃発後の田中英光の在り方は、ほんの僅かの人を除いて誰もがそうだったのだから責めるわけにはいかぬが、戦争体制に完全に呑み込まれて熱情的に文学的戦争指嗾者を果たしていた。戦争は負けて終わった。召集による二年間の在籍のままの空間も入れて十年間勤めた会社は軍需会社だったので一般の人たちより楽に暮らせた事で辛楚の感は淡く、離職は人員整理によるもので自ら望んだわけではない。天皇親政の大日本帝国憲法は主権在民の民主憲法に変わった。新しく生まれ変わった新生日本の尖兵たらんとの思いからだったとは思うがその動機も私には軽薄に思われる共産党に入党し、家族の貧困をも顧みず献身的に党活動に邁進したらしいがそれは事実だろう。

だが入党四ヵ月でアドルムやヒロポンを常用するようになり、闇市で求める酒を鯨飲するようになる。その一方で有名作家になりたい名誉欲も噴き出す。泡立つような文学盛況の波のなかで、まず、自分の青春を振り返り、小説家として生きる覚悟を固めたいと思ったのだろうか。党活動の傍ら書き下ろしで書いた長編である。

学生時代に六尺二十貫の体格を見込まれてボートのオリンピック選手としてアメリカ体験ももつ私（坂本）は、就職難の時代にコネで就職したゴム会社の営業マンとして朝鮮の京城で下宿住まいしている。二十三歳だった。大卒の上外地手当がつくので軍需会社だったことにもより約百円の給料は現地人が十八円程度だったのに比べて十分余裕を持てる額だったが、営業という仕事が馴染めず、精神的苦痛から学生時代に覚えた酒と女に溺れ、常態となった質屋通いでも足りず、本を売り、さらに高利の借金もするような懶惰な生活をしていた。その一方で東京の友人と出していた不定期発行の同人雑誌『非望』に載せた小説が褒められたことで大作家を夢見る名誉欲もふくらんでいた。また、「やさしくてきれいでりこうな」女性を恋人に持ちたくて焦ってもいた。恋人欲しさは彼を売春街に駆り立てる。ある日、遊楽街で二升も酒を飲んだ（度外れではないか）泥酔から喧嘩に巻き込まれ怪我をして入院する。病院で親しくなった少年の姉の中川八重を知り、小卒の趣味の低さにうんざりしながらも付き合いを続けていながら入院中に入社した十九歳のタイピスト江原曉子の「性格的な魅力」に惹かれて交際し始める。間もなく八重の家に下宿する。八重と曉子両者の間を往き来しているうちに八重の母が心配して注意していた「肉体的」関係を八重と持ち、妊娠させてしまう。さらに酒場で知り合った子持ちの梨枝と「愛人」関係を持つ。梨枝にはKという夫がいるが彼の家庭内暴力を逃れて障害のある子連れで働いている女だった。八重と結婚せざるを得なくなる。梨枝はKのもとに帰ることになったが間もなく死んだ事が伝えられる。十二月の暮、二十四歳の私は二十二歳の八重と、私の親の反対を押し切って、頼んだ仲人役からも断られ、誰の立ち会いもない寂しい結婚式を朝鮮神宮であげる所で終わる。

名誉欲の強い彼はよい小説を書きたい思いが強く、そのために人（特に女性）の生活を知りつくしたい貪婪さから、質入れした金で酒と女を求めて深夜の町を彷徨うのだった。だが彼にとって何より大切なのは「肉体の欲望」だった。「結婚なんかくじ引きのような」ものとの結婚観から、「無学」で「貧しく苦労してきた娘」なら自分に感謝して献身的に尽くすだろう、と愛しているわけではない八重と結婚することにしたのだった。ここで「八重」と名づけられた妻（本命喜代）については繰り返して描かれるが、その描き方は女性の人権無視、侮辱でしかない。しかも妻は生存していて、彼との間に生まれた四児を育てていたのだ。「知識人」という言葉が頻出する。もちろん「知識人」には彼自身が包含されている。時代は戦争下といえ、転向文学盛行期を過ぎ、中野重治の感動的作品や佐多稲子の「くれなゐ」ほか、現視点から読めばフェミニズムやジェンダー批評の見られる作品が幾つも発表されていたのに、英光は「優れた小説、優れた小説」と口癖のように言いながら、優れた小説から何も吸収していない。

八重との結婚を決めた後も江原曉子と「無節操」に二人の間を往き来している。彼は自分の仕事について「相手には酒をのませ、女をだかせ、

金をにぎらせ、こちらはカスリをとり、品物をごまかし、嘘をつき、詰まりは相手の人間を精神的に殺すことで殺人罪を犯し、こちらもただ合法的というだけの泥棒を犯すことになる」という資本主義社会のメカニズムに気づいていながら、そこにどっぷり漬かっているうちに「肥壺にうごめいている蛆に糞の臭さがわらないように」自分もいつしか蝕まれていた、と書いていて自覚していたことになるが、そこから這い出ようとはしていない。依然として二叉関係を続けるだけでなく「商売女」とも関わっている。曉子にも八重にも飽きた頃外勤の途中で入った店で出会った夫も子もいる梨枝にのめりこみ、一升酒に一ダースのビールを高利貸から借りた借金で飲みながら毎晩通う。誰にも祝福されない結婚式でこの作品は終わるが途中で何度か投げ出したくなる不快な作品だ。

この作品は京城で会社員生活を送っていた時代一九三五年から三七年を回顧した作品だが「青春小説」と位置づけられている。『酔いどれ船』時代の数年前の時代に当たるが、『酔いどれ船』のかなりな部分に通底する酒と女との関わりが薄汚く書かれている。これが「青春」か。川村湊は文庫の解説に「現実社会の腐敗に青年らしい潔癖な正義感を燃やす場面や、デカダンスとして京城の妖しげな路地にはまり込む様子が描かれている」「青春小説」としているが、大酒を飲み、相愛相敬ではない複数の女性と深い関係をもちながら妖しげな歓楽街の女とも高利の借金までして出入りするのが「青春」なのだろうか。「青春」とはこんな薄汚いものなのか。この作品は田中文学の「原点」とされているが、それは言えるだろう。

『さようなら』（1949・12、『個性』）

死ぬ理由も、死ぬつもりもなかったと思われるのに自裁の文字道り絶筆となった作品。この作品が純度の高い文学雑誌『個性』に載った発行日は十二月一日。英光の死は十一月三日。死の前にゲラは見ていただろうか。「人間は自分の愛する周囲の人たちや、未来の人類に信頼と責任感を持ち、生命を大切にしなければならぬ。」「どんなに辛く恥ずかしく厭らしくても、生きて努力するのがぼくたちの義務と責任である。（略）決してあつさり、この世に、『さよなら』を告げてはいけない」とありながら、「ぼくは自分とその周囲を見渡してウンザリし、正直な話、『皆さん、それでは左様なら』と例の春婦とルンペンを愛し、しかも革命に協力したといわれるソ連初期の詩人マヤコフスキーみたいに遺書を残し、冷たい拳銃の口を自分のこめかみに押しつけたい欲望にもかられる」ともある。三千の将兵が海の藻屑と消えた戦艦大和の悲劇に触れ、「悪辣な犯罪者として処刑された、東条以下の戦犯の愛読作家であり」彼等の「代弁者」でもある吉川英治が「依然として百万の愛読者をもっている」ことや特攻機出現のニュース映画に拍手する日本人の無神経さを弾劾した上で、「ところで、ぼくは自分が、時代に傷つけられ、遣切れぬほど無知で不潔で図々しい日本人たちのひとりとなってしまった」ことへの認識から、「この人生に『さよなら』を告げたい」とある。韓国（朝鮮）の皇民化、侵略に熱情的に果たした自己の戦争責任への自覚の念、慚愧・反省は英光の戦後作品から感動的に読み取れるものはない。「時代に傷つけられ」たでケリがつけ

られるのだろうか。戦後も四年経って戦争を客観的に描いた優れた作品が生まれ、文学者の戦争責任論も議論されだした頃である。

彼は自分が、「皇道精神の昂揚」を掲げた総督府の意に添った『国民文学』の創刊号から代表的作家として積極的に参加・協力し、総督府直属の『緑旗』や『京城日報』でも活躍しているばかりか、それでも足りずに、四十二年九月には日本文学報国会の結成に刺激されて、韓国（朝鮮）の文学者牧洋・金村龍歳（共に創氏名）を語らって「朝鮮文人協会」を設立して、「国民総力運動の一翼として国民文学の建設」を目的とし、「一　文壇の国語化促進、二　文人の日本的訓練、三　作品の国策協力、四　現地への作家動員」を掲げて実践している。朝鮮における戦時体制版となっている。因みに既に何度も前稿で説明済みだが、ここに言う「国民」とは日本国民のことで、「国語」は日本語のことで「国策」とは日本の戦争国策のことである。

「作家的自由」が欲しくて「脱党」したが「共産主義思想」を「美し」く思う気持ちに変わりはないが人間の醜さから党に「さよなら」したのだと「地下室から」に書いているが、戦時下（のみならず）の自分は醜くなかったといえるだろうか。軍隊では中国人・日本人の多くと「さよなら」した。残虐的に殺された中国人への「見知らぬ中国人よ、永久にさようなら」の繰り返しに次第に鈍感になり、上官の気を損ねぬために自分も中国人を殺し、傷つけて「さよなら」したと言う。初年兵岡田は、いい家の一人息子で京大では成績優秀のラグビー選手だったが、血生臭い戦争で狂ったのだろうか、装備を次々に置き忘れ分隊長に素裸にされて残酷なリンチを受け、「お母さん、さようなら」の声を残して息絶えたのを兵隊たちは面白がって見物していた。英光は、「理由なく放火、殺人、傷害、強盗、強姦を行う戦争こそ」「狂的行為」で「それを拒絶した岡田に残忍なリンチを加えた分隊長たち、それを面白がって眺めていたぼくたちのうち、誰が真の狂気であろうか。」「兵器を棄てることで全身で戦争を拒絶した」「岡田の神経に、今ではむしろ健康なものを感じる」とあるが、残忍なリンチに悶える戦友を面白がって見ていられる神経こそ狂気ではないか。想像を絶した残虐な場面だが、淡々と描き、銀蠅の群がった死体に「あっさり『さよなら』」して見捨てたまま行軍を続けたとあり、人間的同士愛もなく、見捨てた酷薄さへの自虐もみられぬ描き方に文学的感動を読者の私は与えられない。

野戦生活ではこのような「非情」な数多くの「さよなら」をして帰還し、職場に戻ったが日本の敗色が濃くなると「さよなら」を告げる機会も多くなった。勤労動員できていた女学生だろう、三十人もの若い娘が「童貞」（こんな言葉を入れるのが英光だ）の舎監と共に爆弾の直撃で即死したむごたらしい場面にも「宿命」として「あっさり」さよならしたとある。伊豆の田舎に疎開させた妻子にも「あっさり」さよならを告げていた。この辺りまでが戦争の時代での「さよなら」だが、ここに戦時下では書けなかった戦争批判、懺悔が書かれているだろうか。鮮烈な戦争体験も心からの懺悔や反省、厳しい批判はなく韜晦の姿勢で描かれている。岡田問題にしても、野間宏の「顔の中の赤い月」との違いは大きい。戦争に積極的に加担した彼に、共産党入党してすぐ離党し、酒と女と薬物に溺れる理性、知性の希薄な彼に、真に懺悔、反省の意思があったのだろうか。

「さよなら」の後半は『愛と青春と生活』に描かれた戦中と、「野狐」に代表されるいわゆる〈敬子もの〉に関わる素材中心の女性問題となって

いる。「生きることは恋すること、男は永遠の女性によってのみ救われる。一生に一度、真剣に愛し愛される恋人を得たいと秘かに烈しい望みを抱」いていたが、敗戦前までは「政治意識が強すぎ、政治から脱落後は自意識が烈しすぎて、本当に心と肉体の一致するような恋の経験を持てなかった」というが、二十四歳で「早まった結婚をする前後、恋人とも呼べる三人の女性」がいたとある。三人と同時進行で付き合うような関係で恋人と言えるだろうか。妻として選んだ女性が彼との間に漱石の言う「拷問のような苦痛」によって産んだ四人の子の母となって現存しているのに、英光は随所に繰り返し、「早まった結婚」「小学出の無知な下宿屋の娘だった平凡な女」といった、妻なる女性に対するこの上ない侮蔑、侮辱の言葉を随所に使っている。平然と侮蔑を作品で公表する夫の性具とされ、四人も子をなした妻なる女性の心情も理解し難い。「娼婦と母性の本能を合わせて持」つ女性を「憧れの女性」とする彼が、「パンパン」稼業で旧敵国の男からバラック建ての家を建てて貰った「戦争未亡人」に出会って溺れ、「心と肉体の一致」を体験した初めての女性と言いながら、刃傷事件まで起こしたリエ（山崎敬子）との関係を描いた「野狐」に象徴される〈敬子もの〉に見られる作品は、私には読むに堪えない。「さよなら」はさらに続くが紙幅を失った。

この作品の最期の方に「実はまだ生の世界に『さよなら』をいいたくない」とあり、「自分の復活があると待望する」とも結語のなかにあり、さらに括弧に入れて、「その日まで、さようなら。ぼくはどこかでかならず生きています云々」とつけ加えられている。彼は本当に覚悟の自裁だったのだろうか。太宰の墓前でアドルム三百錠を焼酎一升で飲み、手首を切って、発見されて病院に運ばれたものの息絶えたという。墓前に置かれた新潮社版『太宰治集』に遺書めいたことが書かれていたというからには、ほんとうに死ぬつもりだったのかもしれないが、心から悼む気になれない。

戦後の日本社会は、「かつて自分たちの行った『侵略』を平然と何事でもなかったと見る方向、あるいは、何事もなかったかのように覆い隠す方向に向かっていた」（太田哲男『「断念」の系譜』14・5、影書房）そのありようが、戦争の出来る国への現況をうみ出しているのだろう。田中英光の戦中の戦争使嗾の数々の言行への責任、懺悔を戦後作品にみることは私にはできなかった。

注1　拙著『與謝野晶子』（新典社　1998・10）

注2　拙稿「身も心もささげる『大和撫子』―田村泰次郎の戦争文学」（『買売春と日本文学』東京堂出版　2002・2）